

シオニズムの人間の命に対する無視：ピクアハ・ネフェシュと大イスラエル追求の矛盾

シオニズムは、19世紀末にテオドール・ヘルツルの下でナショナリスト運動として現れ、ユダヤ人の解放イデオロギーとしてしばしば描かれてきました。しかし、その歴史的軌跡は、ユダヤ人も非ユダヤ人も含めた人間の命に対する深い無視を示す、行動とレトリックの不穏なパターンを明らかにしています。このエッセイは、シオニズムが1947年の国連分割案を公式に受け入れたにもかかわらず、二国家解決を本気で追求したことは一度もないと主張します。代わりに、歴史的パレスチナの国境を越えて拡大する大イスラエルのビジョンを一貫して推進してきました。この野心は、ナチス・ドイツとの協力、偽旗作戦、国際外交の拒絶、そしてピクアハ・ネフェシュ（人間の命を保存する神聖な義務）を含むユダヤ教の核心的倫理原則の違反を通じて実現されてきました。

シオニズムのイデオロギー基盤は、ドイツの「血と土」(Blut und Boden) ナショナリズムを反映し、土地を金の子牛—偽の神—に変え、メシアの到来前にイスラエルの地を武力で奪還しないというトーラーの命令に違反しています。この視点から見ると、シオニズムは政治的裏切りだけでなく、神学的異端でもあります。

ピクアハ・ネフェシュとの矛盾：ユダヤ教の倫理的核

ユダヤ教の原則であるピクアハ・ネフェシュ—人間の命の保存がほぼすべての宗教的命を上回る—は、ハラハ（ユダヤ法）の倫理の礎です。創世記1:27（「神は人をその像に創造した」）に根ざし、サンヘドリン4:5（「一人の命を救う者は…全世界を救ったも同然である」）で拡張され、タルムードの伝統（ヨマ82a）は、シャバットやヨム・キプールなどの神聖な禁止事項でさえ、命を救うために脇に置かなければならないと強調しています。

しかし、シオニストの指導者たちは、国家建設の祭壇にこの原則を繰り返し犠牲にしてきました。イスラエルの初代首相デビッド・ベン＝グリオンは、1938年にこの冷酷な計算を次のように述べています：>「ドイツのすべての子供たちをイングランドに連れて行くことで救うことが可能で、エレッツ・イスラエルに輸送することで半分だけ救えるとしたら、私は後者を選ぶ…なぜなら、私たちはこれらの子供たちの計算だけでなく、ユダヤ人の歴史的計算にも直面しているからだ」

（中央シオニストアークাইブ、S25/419）。

即時の生存よりも人口戦略を優先するこの選択は、ピクアハ・ネフェシュに直接矛盾します。それは多くの子供たちを含む人間を国家プロジェクトの道具に貶め、ユダヤ教の倫理の本質を損ないます。

シオニストの軍事作戦も同様に、ユダヤ人とアラブ人の命を無視してきました。イルグンによるキング・デビッド・ホテル爆破事件（1946年7月22日）は、電話での警告があったにもかかわらず、17人のユダヤ人を含む91人を殺害しました。イルグンの戦闘員はアラブ人の変装を着用し、混乱と民間人のリスクを高める戦術でした（英国情報報告、1946年）。デイル・ヤシン虐殺（1948年4月9日）は、イルグンとレヒによって実行され、100人以上のアラブの村人を殺害し、再びアラブ人の変装を使って潜入しました。両事件は、戦略的利益のためにユダヤ人の付随的死を受け入れる意欲を示しています。

今日、この無視はガザでのジェノサイドで頂点に達しています。国連機関、アムネスティ・インターナショナル（2024年12月5日）、国境なき医師団（2025年7月11日）によると、40,000人以上のパレスチナ人が殺害されています。ガザのインフラの80%以上が破壊され（ウィキペディア、「ガザのジェノサイド」、2025-07-17）、190万人が避難しています（UN OCHA、2025）。このような壊滅はピクアハ・ネフェシュを明らかに違反し、領土的・イデオロギー的目的のために人間の命の価値を体系的に下げていることを反映しています。

二国家解決の拒絶：大イスラエルの長年の目標

ユダヤ機関が1947年の国連分割案を公に受け入れたものの、シオニストの指導部はこれを戦術的譲歩と見なしていました。ベン＝グリオンは、投票の数日後に次のように述べました：>

「この案の受け入れは戦術的ステップであり、パレスチナ全体への将来の領土拡大への足がかりだ。」

（ウィキペディア、「国連パレスチナ分割案」、2025-07-02）。

修正主義シオニストのゼエヴ・ジャボチンスキーはさらに明確でした。1935年、ベタルの若者に語りかけ、彼は次のように宣言しました：> 「パレスチナに鉄の壁を築かなければならない。そして、弱者や不適格者がその壁を破れないなら、彼らは取り残されるべきだ。」

（ジャボチンスキーアーカイブ、2/12/1）。

国連の仲介者フォルケ・ベルナドッテ伯爵の暗殺（1948年9月17日、レヒによる）―彼が一部の領土をアラブの支配に戻す提案をした直後―は、シオニストの平和的共存の拒絶をさらに示しました。ベルナドッテはホロコースト中に何千人ものユダヤ人を救いました。しかし、彼の外交が大イスラエルのビジョンに干渉したため、彼は殺害されました。

この野心は、今日、入植地の拡大、パレスチナの土地の併合、軍事的支配を通じて続いています。1967年以来、パレスチナの領土は入植地により40%以上減少しました（カーネギー財団、2024年）、ガザの破壊が今、征服の地図を完成させています。

偽旗作戦：物語の制御のために命を犠牲にする

シオニストグループは、国際世論を操作し、アラブ人を非難するために偽旗戦術を繰り返し使用してきました。イルグンのキング・デビッド・ホテル爆破事件は、アラブ人に変装した工作員を伴い、英国情報機関によって記録された事実です（英国国立公文書館、1946年）。1947年7月、イルグンは二人の英国軍曹の絞首刑中にアラビア語の看板を設置し、アラブ人を非難しま

した（MI5ファイル、2006年）。ラヴォン事件（1954年）はこのパターンをエスカレートさせました：エジプトのイスラエル工作員がアラブ人に偽装し、英国とエジプトの関係を妨害するために西洋の標的を爆破しました。4人の工作員が死亡し、作戦の暴露は外交的崩壊をほぼ引き起こしました（ウィキペディア、「ラヴォン事件」、2025-04-01）。

これらの事件は、アラブ人とユダヤ人の命に対する冷淡さを示しています—死は物語を進めるために戦略的に受け入れられています。この同じ戦略は、今日、イスラエルがガザのすべての抵抗を「テロリズム」とラベル付けし、国連のシェルターや援助サイトで民間人を標的にし、被害者を脅威として枠組みし、殲滅を正当化する形で現れています。

ナチス・ドイツとの協力：シオニズムの原罪

ピクアハ・ネフェシュに対する最も重大な矛盾は、シオニズムの初期のナチス・ドイツとの協力にあります。ハアヴァラ協定（1933年8月25日）は、ドイツのシオニスト連盟とナチス政権の間で署名され、50,000人以上のユダヤ人とその資産のパレスチナへの移転を促進しました。これは、アメリカユダヤ人会議などが宣言したドイツの世界的なユダヤ人ボイコットを効果的に破壊しました（デイリー・エクスプレス、1933年3月24日：「ユダヤがドイツに宣戦布告」）。

シオニストの指導者たちは、集団的救出よりも植民地化を優先しました。ユダヤ機関の救出委員会の責任者イツツハク・グリュンバウムは、1943年に次のように述べました：>「ヨーロッパのユダヤ人を救うために資金を流用すれば、パレスチナでのシオニスト事業を損なう。イスラエルの地の一頭の牛は、ポーランドのすべてのユダヤ人よりも価値がある。」

（ヤド・ヴァシェムアーカイブ、M-2/23）。

この功利主義的計算—将来の国家のために何百万人もの命を犠牲にする—は、一つの命の無限の価値についてのユダヤ教の教えに直接対立します。

BDS、ハーググループ、現代の道徳的清算

1933年のボイコットのハアヴァラによる裏切りは、ボイコット、投資撤退、制裁（BDS）運動への反対に現代の反響を見出します。BDSは、ガザのジェノサイドを背景に、国連報告者、アムネスティ・インターナショナル、国境なき医師団によって支持されており、占領とアパルトヘイトの終結を目指しています。ハーググループの2025年7月16日の制裁—武器禁輸や港湾制限を含む—は、初の主要な国際執行メカニズムを意味します。1933年のボイコットは国家の支援がなく、シオニストの協力によって妨害されましたが、BDSは現在、国際的な法的枠組みによって強化されています。しかし、米国は年間38億ドルの軍事援助をイスラエルに送り続け（2025年予算）、国際刑事裁判所の検察官や一部の裁判官、占領パレスチナ領土に関する国連特別報告者フランチェスカ・アルバネーゼに制裁を課し、草の根の倫理と地政学的利益の間の道徳的行き詰まりを示しています。

神学的禁止：武力による土地の奪還は偶像崇拜

トーラーは、メシアの到来前にイスラエルの地を武力で奪還することをユダヤ人に禁じています。エレミヤ29:7は次のように命じています：>「私があなたを追放した都市の平和と繁栄を求めなさい…それが繁栄すれば、あなたも繁栄する。」

この教えは、ケトゥボット111aで「三つの誓い」として成文化されています：1. ユダヤ人は「壁のように」土地に登ってはならない（つまり武力で）。

2. 彼らは諸国に反逆してはならない。

3. 諸国はイスラエルを過度に抑圧してはならない。

ラシや多くの賢者は、これらの誓いを主権への早すぎる回帰を禁じるものと解釈し、そのような反抗は神の罰を招くと警告しました。ラビ・ヨエル・テイテルバウムは、『ヴァヨエル・モシェ』でシオニズムを異端と呼び、災難を招くと警告しました。

シオニズムによるこれらの誓いの違反は、国家的願望を神学的違反に変えます。出エジプト記32章でイスラエル人が金の子牛を崇拝したように一神のタイミングの代わりを築いた一シオニズムは暴力と血を通じて早すぎる「贖い」を構築します。「大イスラエル」のイデオロギーは、血統と領土支配からアイデンティティが派生するという「血と土」ナショナリズムを反映しています（Marxists.org、「血と土」）。

そうすることで、シオニズムはピクアハ・ネフェシュを放棄し、命の神聖さを土地の偶像崇拜に置き換えます。

結論：シオニズムの倫理的・神学的失敗

シオニズムの歴史一ナチスとの協力、平和的外交の拒絶、偽旗作戦、戦略的な人間の命の無視を通じて一は、ユダヤ教の倫理に対する深刻な裏切りを構成します。そのイデオロギーの根は、トーラーが非難するナショナリストの偶像崇拜を反映しています。ベン＝グリオンの冷酷な計算からガザのジェノサイドに至るピクアハ・ネフェシュの違反は、ユダヤ教の道徳的基盤を損ないます。

トーラーによれば、真のユダヤ人の贖いは、征服ではなく、謙虚さ、正義、神のタイミングを通じて訪れます。それまでは、命一土地ではなく一を保存することが最高の戒めでなければなりません。